すなわち、足軽の家に生まれたものは、足軽として一生を過ごすことを基本とし、足軽の家に一生おれぬ者（次男・三男や娘たち）は、足軽身分の者との縁組を原則としながらも、現実には武士身分の枠を越えた農・工・商、すなわち百姓・町人との縁組が行なわれていたのである。しかもこの枠を越えた縁組については、藩側もゆるやかな態度をとっているようである。しかしこれが、足軽身分より上級とされていた武士との縁組ということになれば、厳しくこれを拒否していたもようである。ここに支配者の足軽に対する、封建社会における位置づけを明確に見ることができる。

このことは、明治政府発足当初、各藩の武士が士族・卒族に分けられ、足軽は卒族とされたことからも明らかであろう。（卒族は間もなく士族に編入された）しかしながら今まで所討してきたこの様な事態は、一七五六（宝暦六）年～一七六二（宝暦十二）年の資料から云われることであり、幕藩体制の崩壊をはじめた第三段階のものである。

幕藩体制確立期なり、第二段階においては事態がどうであったかは、検討する資料は全くといってよい程ない。またここに使った資料を裏付けるため、「毛利藩御用日記」や、「御仕置帳」を見る事が出来れば、更に具体的に出来たであろう。ここかしこと不十分な点が目立つと共に、不勉強なため誤った面が多いことと思われる。その危険を冒しながら敢えてここにまとめた訳で、多くの方々のご批判・ご叱正をお願いするものである。

（おわり）

（追記）この資料は筆者所蔵、和綴の冊子で佐伯藩足軽出頭甲斐孫作が、組内の縁組について上司にお伺いの文書「婚姻口上書」の控書である。

報告

二冊目の節用集

用柴　弘

節用集とは何か。ご存知ない方が多いはず、実は江戸時代に民間で愛用されていた国語の辞書です。「新辞苑」によれば、

「室町時代の日用語の用字、語釈、語源を示した国語辞書。通俗簡易で検索に便であったので、江戸時代にかけて広く行われ、後ことばの読み方からそれに当る漢字を求めるようにした、いろは引きの簡便で実用向かの辞書の総称」

ということになっている。

史談会では、一昨年直川村の曽宮会員から「大増字節用集」と題する、明和八年（一七七一）の刊行本をいただいていたが、今回近所の大島文太郎氏から、両三年後の安永年間発行の「増補節用悉改袋」と題する大冊を頂戴した。佐伯史談会所有の、今から二百年前発売の庶民の百科事典は、これで二冊になった。

実はこの本、ことばや文字の辞典であるだけでなく、次のようなのが内容として載っている。

百官名尽し・本朝年代記・改正御武鑑・武将略伝・御公卿鑑・服忌令・江戸京都大坂街区図・各地諸寺院・松島外景略地絵図・中国反近江八景図と詩歌・諸証文書式・壁塗記抄・囲碁将棋・活花・料理・茶湯・万病妙薬秘伝・五性名乗字吉凶・十干十二支・不成就・その他以上通俗的なものからかなりしっかりした事項を満載している。

一応清拭手入・アイロンかけ、表紙つけも完了し、会員への貸出しに備えている。ご利用下さい。